

佐賀大学地域学歴史文化研究センター
自己点検・評価報告書
(平成18～21年度)

平成22年10月

1. 地域学歴史文化研究センターの目的・目標

(1) 目的・目標

21世紀社会には、新たな学問体系が求められている。佐賀は19世紀後半、近代西欧文明・学問体系を受容した。それがどのような歴史文化を基盤としていたのか、また定着し展開したのかは、現在問われるべき重要な課題である。

佐賀大学が国立法人化を迎えるにあたり設定した理念・中期計画・目標のなかに、「社会が要請する研究分野を担当する文理融合型の研究センター設置を目指す」、「地域住民・市民と大学との地域連携研究を推進し、新たに『地域学』を創出する」とある。

本センターはこれを実現するために、平成18年4月に設立された。従って、本センターの目標は、以下の通りである。

- 1) 本学における文系基礎学の基盤整備を図り、充実・発展させること
 - 2) 地域(佐賀)の歴史文化の固有性と普遍性を探究すること
 - 3) 新たな学問体系としての地域学を創造すること
 - 4) 本学の学問大系に新たな方向性(価値観・世界認識)を提示すること
- この目標実現のため、以下の具体的な研究活動・事業を展開している。

(2) 基本的研究活動・事業

- 1) 地域(佐賀)の歴史文化資料の調査・収集と研究
- 2) プロジェクト(研究)の設定・企画・運営
- 3) 諸データベースの作成
- 4) 「研究紀要」「史料集」「図録」の刊行(企画・編纂)を行い、広く学会等へ調査・研究成果を公表していくこと
- 5) 講演(会)・講座・シンポジウムの開催(企画・設定)
- 6) 地域文化交流協定等による博物館等の特別展示の企画立案、共催事業の展開等により、本学(学生・教職員)及び地域社会へ研究成果を提供すること
- 7) ホームページによるタイムリーかつ簡便な地域歴史情報を広く提供すること

2. 地域学歴史文化研究センターの概要

(1) 設立経緯

佐賀大学では、平成16年(2004)より学長経費による文系基礎学研究プロジェクトを開始した。附属図書館所蔵小城鍋島文庫を調査・公開することと、平成15年2月に結ばれた佐賀大学と小城町(現小城市)との地域文化交流協定事業の支援として、平成16年8月に特別展「小城鍋島藩と島原の乱」を開催し、同図録を刊行した。平成17年には、特別展「小城鍋島家の近代」を開催し、同図録を刊行した。これらの歴史文化研究と地域貢献事業の発展上に、さらには前述の通り佐賀大学中期計画・目標を達成するために、地域学歴史文化研究センターが平成18年4月に設立された。

(2) センターの概要

- 1) 本センターは、地域(佐賀)の歴史文化の固有性と本学文系基礎学研究の現状を踏まえて、考古学、国文・文献学、洋学・思想史、地域史・史料学の4研究部門に専任・併任教員を配置し、地域学創出に向けた研究をすすめている。
- 2) 各研究部門長は、部門のプロジェクトを運営し研究を推進する。
- 3) 研究拠点として、平成18年10月佐賀大学本庄キャンパスに竣工した菊楠シュライバー館を使用し、市民・学生向けの閲覧室・展示室を常備している。
- 4) 教職員構成は以下の通り(平成22年4月現在)

センター長	1名
専任教授	1名
専任准教授	1名
併任教授	1名
併任准教授	1名
併任講師	2名
特命教授	8名
非常勤博士研究員	1名
教務補佐員	1名
事務補佐員	1名

5) 部門別構成は以下の通り(平成22年4月現在)

考古学	重藤 輝行併任講師(部門長、文化教育学部)
国文・文献学	白石 良夫併任教授(部門長、文化教育学部) 井上 敏幸特命教授(佐賀大学名誉教授)
地域史・史料学	伊藤 昭弘専任准教授(部門長) 石川 亮太併任准教授(経済学部) 鬼嶋 淳併任講師(文化教育学部) 生馬 寛信特命教授(佐賀大学名誉教授)
洋学・思想史	青木 歳幸専任教授(部門長) 鈴木 一義特命教授(国立科学博物館理工学研究部主任研究官) 長野 暹特命教授(佐賀大学名誉教授) 平井 昭司特命教授(前東京都市大学教授) 松田 清特命教授(京都大学大学院人間環境学研究科教授) ミヒェル・ヴォルフガング特命教授(九州大学名誉教授) 村上 隆特命教授(京都国立博物館保存修理指導室長)

6) 歴任教職員(肩書きは当時のもの)

○センター長

宮島 敬一(経済学部教授)	平成18年4月～19年2月
古賀 和文(副学長・理事)	平成19年3月～7月(センター長事務取扱)
高崎 洋三(医学部教授)	平成19年8月～22年3月
半田 駿 (農学部教授)	平成22年4月～

○副センター長

飯塚 一幸(文化教育学部助教授)	平成18年4月～19年3月
青木 歳幸(センター専任教授)	平成19年4月～

○部門長

考古学研究部門

佐田 茂 (文化教育学部教授)	平成18年4月～20年3月
重藤 輝行(文化教育学部講師)	平成20年4月～

国文・文献学研究部門

井上 敏幸(文化教育学部教授)	平成18年4月～20年3月
生馬 寛信(文化教育学部教授)	平成20年4月～22年3月
白石 良夫(文化教育学部教授)	平成22年4月～

洋学・思想史研究部門

青木 歳幸	平成18年4月～
-------	----------

地域史・史料学研究部門

飯塚 一幸 平成18年4月～19年3月

伊藤 昭弘(センター専任講師) 平成19年4月～

○専任教員

教授 青木 歳幸 平成18年4月～

講師 伊藤 昭弘 平成18年4月～19年11月

准教授 伊藤 昭弘 平成19年12月～

○併任教員

佐田 茂 平成18年4月～20年3月

井上 敏幸 平成18年4月～20年3月

飯塚 一幸 平成18年4月～19年3月

石川 亮太 平成18年7月～

鬼嶋 淳 平成19年10月～

重藤 輝行 平成20年4月～

生馬 寛信 平成20年4月～22年3月

白石 良夫 平成21年4月～

○特任教員(平成21年4月より特命教員に改称)

井上 敏幸(佐賀大学名誉教授) 平成20年4月～

鈴木 一義(国立科学博物館理工学研究部主任研究官) 平成20年10月～

松田 清 (京都大学大学院人間環境学研究科教授) 平成20年10月～

村上 隆 (京都国立博物館保存修理指導室長) 平成20年10月～

長野 暹 (佐賀大学名誉教授) 平成21年4月～

生馬 寛信(佐賀大学名誉教授) 平成22年4月～

平井 昭司(前東京都市大学教授) 平成22年4月～

ミヒエル・ヴォルフガング特命教授(九州大学名誉教授) 平成22年4月～

○非常勤博士研究員

野口 朋隆 平成20年5月～

○教務補佐員

伊藤 彰子 平成18年4月～19年11月

亀井 森 平成19年11月～22年3月

大塚 俊司 平成20年5月～

○事務補佐員

古賀 亜紀 平成21年4月～

3. これまでの活動に関する自己評価

(1) 教育

- ア) 教養教育を所管する教養教育運営機構との連携をすすめた。具体的には専任教員による教養教育授業担当(2名が年2コマずつ、事業一覧J)、教養教育運営機構役員(部会長)就任、10人の教員によるオムニバス科目『佐賀』学入門の開講などである。
- イ) 上記のほか、大学コンソーシアム授業開講や、eラーニング、文化教育学部での地域学関連専門科目開講など、学内他部局と連携し教育活動を実施した(J)。
- ウ) センター内に閲覧室を設け、歴史・文化・郷土史関係の書籍・資料を1379点配置し、学生・市民の利用に供したほか、研究成果を展示室にて公開した(A-2~7)。
- エ) 山本家文書ワークショップを開催し、学生・市民に古文書整理の意義や実践活動の方法などを指導した。
- オ) 公開講座を毎年開講し、市民向けの地域学教育を図った(D)。

〈自己評価〉

本センターは研究を専門としており、設立以来特目標を定めていない。しかし当初より研究成果の教育活動への活用を意図してきた。具体的には大学教養教育における地域学教育を構想し、上記の通り教養教育機構との連携を図った。今後も地域学教育の確立に向けた努力をすすめていく。

社会教育の面では、市民参加型の古文書整理ワークショップや公開講座を開催し、地域学の有効性や史料保存の重要性について、市民の理解が深まるよう努めた。

(2) 研究

- ア) 設立以来、毎年小城市教育委員会との共催展の開催・図録の刊行、研究紀要の刊行を実施し、佐賀地域に関する研究成果を着実に積み重ねた(事業一覧A-①-1~4、F-1~4、10~13)。
- イ) 佐賀大学附属図書館所蔵史料の研究・公開推進のため、史料目録1冊、史料集2冊を刊行した(F-5~7)。
- ウ) 地域学研究の基礎的情報を蓄積するため、史料調査を実施した(E)。そのなかで山本家文書や武藤家文書については研究にも活用し、専任教員が成果を発表した(K-①-3、②-3など)。また佐賀県立図書館などと協力し、データベースの構築をすすめている(H-4)。
- エ) 国際シンポジウムを2回開催し、国内外研究者との意見交換に努めた(C-1、2)。
- オ) 学内プロジェクト「佐賀学」創成にむけた地域文化・歴史の総合的研究を立ち上げ、学内教

- 員と連携しながら史料調査・研究会などを実施し、佐賀地域の歴史解明、「佐賀学」構築に向けた取組をすすめている(H-1)。また本プロジェクトにおいて、築地反射炉跡・三重津海軍所跡など佐賀藩科学技術・軍事施設跡の地中レーダー探査を実施した(E-6、7)。
- カ) 前掲「佐賀学」創成にむけた地域文化・歴史の総合的研究の一環として地域学シンポジウムを開催し、地域史研究における大学の役割について議論した(C-3)。またその成果を、報告書として刊行した(F-8)。
- キ) 研究プロジェクト「千葉氏研究プロジェクト」を立ち上げ、設立以来成果をあげていなかった佐賀中世史について集中的に取り組むこととした(H-2)。中間報告として展示開催・図録刊行を実施したほか(A-①-4、F-4)、平成23年3月刊行の研究紀要にて小特集を組む予定である。また平成21年2月より研究プロジェクト「小城の教育」を開始し、平成22年秋の小城市との共催展にて成果を公開する予定である。
- ク) 科学研究費補助金・新学術領域研究に、センターが中心となって国内外研究者100名余りを組織して応募したが、2度とも不採択であった(H-5、6)。しかし得られた研究者ネットワークをセンターの研究に活用するほか、今後も大型科研費に応募する予定である。
- ケ) 教員・教務補佐員が外部資金を獲得した(I)

〈自己評価〉

設立以来、さまざまなかたちで着実に研究成果を積み重ねることができたことは高く評価でき、また大学所蔵資料の研究成果公開に、地域自治体・博物館と連携して研究調査・展示等に当たる例は少ないが、本センターでは、歴史文化による地域研究・地域貢献のモデルを示し得たと自負している。今後も更なる積み重ねを続け、「佐賀学」「地域学」構築を目指す。

(3) 国際交流・地域貢献

- ア) 設立以来、毎年小城市教育委員会との共催展を開催し、佐賀大学附属図書館『小城鍋島文庫』の研究のほか、センターにおける研究成果を市民に公開した(事業一覧A-①-1~4)。
- イ) 上記共催展に伴い講演会を毎年3回開催した(B-2~5)。
- ウ) センター設立記念講演会には、学内外から約130名の参加者を得た(B-1)。
- エ) そのほか関係機関との共催講演会を随時開催した(B-6~9)
- オ) 佐賀県・佐賀市と協力し、三重津海軍所跡など旧佐賀藩科学技術・軍事関連施設跡などの世界近代化遺産登録に向けたシンポジウムを開催した(C-4、6)。また施設跡の地中レーダー探査の成果を佐賀市に提供し、発掘調査に協力した(E-6、7)。
- カ) 学内プロジェクト「佐賀学」創成にむけた地域文化・歴史の総合的研究の一環として、佐賀県における公文書・歴史資料保存を推進するためシンポジウムを開催し、その報告書を刊行した(C-5、F-9)。
- キ) 佐賀県立図書館・小城市・鹿島市と協力しての史料調査を実施し、その成果をデータベース

で公開すべく準備をすすめている(H-4)。またデータベースでは、佐賀県内の遺跡データをまとめた「遺跡データベース」、大正期以降の佐賀県における事項をまとめた「佐賀大正・昭和期年表データベース」を準備している。

ク)佐賀学に公開講座を5回企画・開催した(D)。受講無料だった佐賀県立佐賀城本丸歴史館との共催講座は毎回50名前後の参加者を得たが、有料企画では15名前後にとどまっており、受講者増加に向けた取り組みが必要である。

ケ)国際シンポジウムを2回開催し、英・米・韓・中の研究者と意見交換した(C-1、2)。

コ)石川亮太併任准教授(平成19年4月～、韓国)、長野暹特命教授(平成21年に1回、中国)、亀井森教務補佐員(平成20年～22年に8回、台湾)が長期研修・調査を行った。

サ)ホームページを公開し、センター事業の紹介や研究成果の発表を行った。

〈自己評価〉

展示・講演会・公開講座の開催による研究成果の市民・地域社会への還元、史料調査やシンポジウムなど地域歴史遺産保存のための活動など、センターでは多くの地域貢献活動を実施し、佐賀大学においても特筆すべき成果といえる。特に展示については、「研究」の項でも述べたが、大学における研究の成果を地域に還元するモデルケースとなり得るであろう。史料保存についても、講演会・シンポジウムを契機として、佐賀市などでアーカイブズの取り組みが生まれつつある。このように、センターの活動は地域に様々な影響を与えており、高く評価できる。

国際交流については、2回のシンポジウムは有意義なものであった。またセンター教職員による海外留学・調査も実施しており、今後も国際交流を活発にすすめていく予定である。

(4)組織運営

ア)平成22年4月現在センター長以下専任教員2名、併任教員4名、特命教員8名、非常勤博士研究員1名、教務補佐員1名、事務補佐員1名を配置し、センター長を中心とした円滑な組織運営・研究活動に努めている。また、文化教育学部や教養教育機構、附属図書館等、他部局との連携も進めている。

イ)各学部から選任された委員、附属図書館長・総合情報基盤センター長など本センターの業務に関わる部局の部局長など学長が必要と認めた委員、本センター長・副センター長・専任教員・部門長により構成する運営委員会(学部の教授会に相当)を開催し、センター運営に関わる事案の審議を行った。各年度の開催回数は以下の通り。

平成18年度 3回

平成19年度 5回

平成20年度 3回

平成21年度 5回

ウ)センター専任・併任教員による会議を2ヶ月に1度開催し、センターの運営について検討し

た。

エ)平成20年4月より特任教員・研究員制度を設け(平成21年4月より特命教員・研究員に改称)、センターの事業に学外研究者の協力を得る体制を整えた。

オ)これまで十分な予算額を得て、研究推進に最大限活用してきた。今後は外部資金の獲得により財務体制の強化を図るとともに、支出削減の取り組みも、これまで通り返ける必要がある。

カ)菊楠シュライバー館の設備を最大限活用しているが、活動の拡大及び資料の増大による施設の狭隘化が限界に達しており、早急な対応を取る必要がある。

キ)貴重資料が保管されているので、セキュリティ確保のため、セコムに夜間警備を依頼しているが、火災への対応は全く施されておらず、防火設備の充実もしくは貴重資料の別置を検討する必要がある。

〈自己評価〉

財務面も含めた組織運営は円滑にすすんできたが、今後は研究推進のため、学内教員、自治体の文化財担当者・学芸員、市民団体など地域社会との連携が今以上にできるよう、体制作りをすすめていく。施設面では、現状の菊楠シュライバー館では研究活動に支障が出かぬだけでなく、所蔵・借用している古文書など貴重な地域の文化財を失う可能性さえあり、早急な対応が必要である。

4. 事業一覧

個人の肩書はすべて当時のもの

A) 展示

① 特別展

○ 主催・共催

◇ 小城市教育委員会との共催展(於 小城市立歴史資料館)

1 特別展「成立期の小城藩と藩主たち」

(平成18年10月14日～11月12日)

2 特別展「海外交流と小城の洋学—小城鍋島文庫にみる—」

(平成19年10月13日～11月18日)

3 特別展「黄檗僧と鍋島家の人々—小城の潮音・梅嶺の活躍—」

(平成20年10月18日～11月16日)

4 特別展「中世小城の歴史・文化と肥前千葉氏」

(平成21年10月17日～11月15日)

◇ 佐賀県立佐賀城本丸歴史館との共催展(於 佐賀県立佐賀城本丸歴史館)

5 「近世の活字文化と佐賀藩」展

(日本近世文学会秋季佐賀大学大会実行委員会共催、平成19年10月12日～11月25日)

6 「西洋医学と佐賀藩」展

(平成21年4月24日～6月7日)

○ 後援

7 特別展「黄檗文化と鹿島藩」

(「黄檗文化と鹿島藩」実行委員会主催、地域学歴史文化研究センター・鹿島市など後援、平成22年5月12日～6月2日、於 祐徳博物館)

② センター展示室(菊楠シュライバー館1F)におけるミニ展示

○ 常設展

1 「写真にみる旧制佐賀高校」

○ 企画展

2 センター開館記念・佐賀大学「来てみんなしゃい！佐賀大学へ」ミニ展示(平成18年10月6日～11月5日)

3 センター開館記念・佐賀大学「来てみんなしゃい！佐賀大学へ」ミニ展示「幕末佐賀の医師と医療—小城鍋島文庫にみる」(平成19年1月26日～2月23日)

4 「成立期の小城藩と藩主たち」(平成19年5月1日～6月29日)

5 「山本家文書」(平成19年8月24日～11月13日)

6「海外交流と佐賀」(平成20年7月1日～12月29日)

7「黄檗宗と鍋島家の人々」(平成21年8月8日～11月15日)

B) 講演会

○センター主催講演会

1地域学歴史文化研究センター開館記念式典・記念講演(平成18年10月6日、於 佐賀大学)
所 理喜夫(地方史研究協議会会長、駒澤大学名誉教授)「地域学と地方史研究——七世紀の佐賀地方を事例として——」

松田 清 (京都大学大学院人間・環境学研究科教授)「海軍創設からパリ万博へ——蘭学者佐野常民の軌跡——」

○小城市教育委員会との共催展記念講演会(於 小城市立歴史資料館)

2特別展「成立期の小城藩と藩主たち」記念講演会(平成18年)

伊藤昭弘(センター専任講師)「成立期の小城藩について」(10月14日)

野口朋隆(九州大学大学院比較社会文化研究院特別研究者)「小城鍋島家の家臣団編成について」(10月28日)

大庭卓也(福岡教育大学非常勤講師)「鍋島直能の学術と文芸」(11月11日)

3特別展「海外交流と小城の洋学——小城鍋島文庫にみる——」記念講演会(平成19年)

青木歳幸(センター教授)「海外交流と蘭学者たち」(10月13日)

松田清(京都大学教授)「小城藩の洋学——人工体普録を中心に——」(10月20日)

ミヒェル・ヴォルフガング(九州大学教授)「ヨーロッパ人からみた——七世紀の日本」(同上)

岩松要輔((財)鍋島報効会徴古館館長)「幕末小城藩の西洋形帆船[大木丸]について」(11月11日)

4特別展「黄檗僧と鍋島家の人々——小城の潮音・梅嶺の活躍——」記念講演会(平成20年)

井上敏幸(センター特任教授)「小城の黄檗僧潮音と梅嶺」(10月18日)

大園隆二郎(佐賀県立図書館近世資料編さん室長)「聖徳太子五憲法と潮音」(11月8日)

錦織亮介(北九州大学名誉教授)「佐賀県の黄檗美術」(11月15日)

5特別展「中世小城の歴史・文化と肥前千葉氏」記念講演会(平成21年)

宮島敬一(佐賀大学教授)「肥前千葉氏の繁栄とその歴史的背景」(10月24日)

野口朋隆(センター非常勤博士研究員)「江戸時代の千葉氏について」(10月31日)

丸井敬司(前千葉市立郷土博物館館長)「千葉氏と妙見信仰」(11月14日)

○その他共催講演会

6「鹿島鍋島藩の政治と文化Ⅱ」(平成19年9月29日、人間文化研究機構国文学研究資料館・祐徳稲荷神社主催、地域学歴史文化研究センター・佐賀新聞社後援、於 祐徳稲荷神社参集殿)

久保田 啓一(広島大学教授)「歌人としての鍋島直郷」

川平 敏文(熊本県立大学准教授)「鍋島直郷と神道学—井田道祐を中心に」

小宮 木代良(東京大学准教授)「鍋島氏の系譜言説と鹿島鍋島家」

7「近世の活字文化と佐賀藩」展講演会(平成19年11月11日、佐賀県立佐賀城本丸歴史館・日本近世文学会秋季佐賀大学大会実行委員会共催、於 佐賀県立佐賀城本丸歴史館)

高山節也(二松学舎大学教授)「佐賀藩の漢籍」

中野三敏(九州大学名誉教授)「九州の地方版」

8特別講演会「歴史的資料の科学的な分析法」(平成20年6月20日、佐賀大学シンクロトン光応用研究センター共催、於 佐賀大学)

田端正明(佐賀大学教授)「シンクロトン光を用いる微量局所分析」

脇田久伸(福岡大学教授)「軽元素のX線吸収スペクトルのマッピングをめざす試み」

下山進(吉備国際大学教授)「文化財を科学の目で探る—文化財の非破壊分析法—」

9特別展「黄檗文化と鹿島藩」記念講演会(平成22年5月15日、「黄檗文化と鹿島藩」実行委員会主催、地域学歴史文化研究センター・鹿島市など後援、於祐徳稲荷神社参集殿)

錦織亮介(北九州大学名誉教授)「鹿島の黄檗寺院と美術」

井上敏幸(センター特命教授)「黄檗僧と鹿島藩の人々」

C) シンポジウム

1センター設立記念国際シンポジウム「医療の近代化と歴史研究—日英米比較史の視座から—」(平成19年1月28日、於 佐賀大学)

基調講演 R. A. スティーヴンス(米・コーネル大学教授)

記念講演 I J. V. ピックストン(英・マンチェスター大学教授)「病院史から見える英国社会—産業革命から現在まで」

記念講演 II 酒井シヅ(順天堂大学客員教授、日本医史学会理事長)「近代日本医学の成立と周辺事情」

シンポジウム「医療の近代化と歴史研究の可能性」

青木歳幸(センター専任教授)「江戸時代の医師と医療」

佐藤英俊(佐賀大学助教授)「明治前期の医学教育—好生館とメイヨー・クリニック—」

猪飼周平(佐賀大学助教授)「病院の世紀としての二〇世紀」

2仁川・長崎開港場ワークショップ(平成19年9月29日、地域学歴史文化研究センター・(財)仁川文化財団共催、於 長崎歴史文化博物館)

崔元植(仁川文化財団代表理事・仁荷大学校教授)「東アジアの中の仁川」

白池雲(仁川文化財団研究出版チーム長)「植民地の記憶, その再領土化のために」

李玉蓮(中国延辺大学外国文学科教授)「近代期韓国の華僑」

青木歳幸(センター専任教授)「長崎でのシーボルト外科手術を記録した農民: 一九世紀前半からの蘭学の普及と長崎」

籠谷直人(京都大学人文科学研究所教授)「東アジアにおける自由貿易原則の浸透と華僑華人ネットワーク」

高田美由紀(長崎市教育委員会 出島復元整備室)「蘇る出島～出島復元整備第Ⅱ期事業を中心に～」

3第1回地域学シンポジウム(平成20年12月4日、於 佐賀大学)

宮島敬一(経済学部教授)「地域史・説話と地域社会の形成－黒髪山為朝伝説を巡って－」

吉田伸之(東京大学教授)「単位地域の調査・研究・叙述－長野県下伊那における実践から－」

奥村弘(神戸大学教授)「地域歴史文化における大学の役割－神戸大学と小野市の連携を中心に－」

青木歳幸(センター専任教授)・伊藤昭弘(センター専任准教授)「佐賀大学地域学歴史文化研究センターの地域史研究の取り組み」

4世界遺産シンポジウム(佐賀県など共催、平成21年2月21日、於 佐賀大学)

スチュアート・スミス(国際産業遺産保存委員会事務局長)「幕末佐賀遺産の世界遺産としての価値」

長野 暉(佐賀大学名誉教授)「幕末佐賀遺産の概要」

パネルディスカッション「幕末佐賀が果たした日本近代化への役割と未来へのメッセージ」

5第2回地域学シンポジウム「史料保存とアーカイブズ」(国文学研究資料館共催、平成21年11月15日、於 佐賀大学)

高橋実(国文学研究資料館教授)「アーカイブズ・システムと公文書管理法－佐賀にもアーカイブズを－」

小松芳郎(松本市文書館館長)「地方文書館の設立と問題点」

平田豊弘(天草市教育委員会主幹)「情報公開から天草アーカイブズへ」

パネルディスカッション

6世界遺産シンポジウム「日本の近代化は佐賀から始まった」(佐賀県など共催、平成22年3月21日、於 アバンセ)

前田達男(佐賀市教育委員会文化振興課、世界遺産調査室長)「佐賀市重要産業遺跡の発掘調査～三重津海軍所跡を中心として～」

野口朋隆(センター非常勤博士研究員)「佐賀藩三重津海軍所の成立と活動～文献調査から～」

平井昭司(東京都市大学教授)・加藤将彦(東京都市大学研究生)・長野 暉(センター特命教授)「佐賀藩反射炉で融解した鉄の自然科学的分析」

土師俊資(佐賀伝承遺産研究会会長)「築地反射炉と長崎四郎ヶ島の保全について」

D) 公開講座など

- 1地域学歴史文化研究センター・佐賀新聞文化センター提携講座「再発見！佐賀の歴史と文化」(平成18年10月～19年3月、全8回、於 佐賀新聞文化センター)
- 2佐賀大学公開講座(センター企画)「佐賀の歴史文化と近代化—教育県佐賀の源流をたどる—」(平成19年2月～3月、全5回、於 佐賀大学)
- 3佐賀大学公開講座(センター企画)「文化の先進受容地佐賀の魅力をさぐる」(平成19年12月～20年2月、全5回、於 佐賀大学)
- 4佐賀大学公開講座(センター企画、佐賀県立佐賀城本丸歴史館共催)「佐賀学のススメ—近世から近代の佐賀—」(平成20年12月～21年2月、全3回、於 佐賀県立佐賀城本丸歴史館)
- 5佐賀大学公開講座(センター企画、佐賀県立佐賀城本丸歴史館共催)「佐賀学のススメⅡ」(平成21年12月～22年2月、全3回、於 佐賀県立佐賀城本丸歴史館)

E) 調査

- 1伊万里市・山本家文書(酒造業、佐賀県議など、約1万5千点) 平成18年度～
※市民ボランティア参加によるワークショップを全69回開催(平成18～21年)
- 2佐賀市・武藤家文書(佐賀藩士、陸軍、約300点) 平成18年度～19年度
- 3鹿島市・中野家資料(医者、105点) 平成18年度
- 4佐賀大学附属図書館所蔵市場直次郎コレクション(市場直次郎氏収集の美術・典籍コレクション、約2200点) 平成18年度～21年度
- 5唐津市・馬郡家文書(医者、約200点) 平成19年度
- 6築地反射炉跡地中レーダー探査(平成20年12月13日)
- 7三重津海軍所跡地中レーダー探査(平成21年5月28日)
- 8センター所蔵大内文庫(大内初夫氏収集の典籍類、約600点) 平成21年度～
- 9鹿島市・福源寺(黄檗宗、典籍類、約500点) 平成21年度～
- 10佐賀市・深江家文書(佐賀藩士、約1000点) 平成21年度～
- 11佐賀市・北川家史料(佐賀市長石丸勝一関係史料、佐賀県立図書館寄託、同館と共同調査、約2万点) 平成21年度～

F) 刊行物

○特別展図録

- 1『成立期の小城藩と藩主たち』(平成18年10月、125頁)
- 2『海外交流と小城の洋学—小城鍋島文庫にみる—』(平成19年10月、139頁)
- 3『黄檗僧と鍋島家の人々—小城の潮音・梅嶺の活躍—』(平成20年10月、119頁)
- 4『中世小城の歴史・文化と肥前千葉氏』(平成21年10月、123頁)

○史料集・史料目録

- 5『市場直次郎コレクション目録』(平成19年11月、335頁)

6『「小城藩日記」にみる近世佐賀医学・洋学史料(前編)』(平成21年3月、257頁)

7『「小城藩日記」にみる近世佐賀医学・洋学史料(後編)』(平成22年2月、371頁)

○報告書・シンポジウム記録集

8『「佐賀学」創成にむけた地域歴史文化の総合的研究—略称「佐賀学」創成プロジェクト—平成20年度活動報告書』(平成21年3月、82頁)

9『第2回地域学シンポジウム「史料保存とアーカイブズ」講演会・シンポジウム』(平成22年2月、93頁)

○研究紀要

10『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』1号(平成19年3月、141頁)

11『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』2号(平成20年3月、91頁)

12『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』3号(平成21年3月、82頁)

13『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』4号(平成22年2月、118頁)

G) 学会共催

1第65回民衆思想研究会(平成19年8月25日、於 佐賀大学)

2日本近世文学会平成19年度秋季大会(平成19年11月10日～12日、於 佐賀大学)

3九州前方後円墳研究会(平成20年5月31日～6月1日、於 佐賀大学)

4第116回日本医史学会大会(平成21年6月6日～7日、於 アバンセ)

H) 研究プロジェクトなど

○佐賀大学学内研究プロジェクト

1「佐賀学」創成にむけた地域文化・歴史の総合的研究(代表青木歳幸(センター専任教授)、学内教員 名が参加、平成20年度～22年度)

○センター内研究プロジェクト

2小城市との研究プロジェクト「千葉氏研究プロジェクト」(代表宮島敬一(佐賀大学教授)、平成20年10月～23年3月)

3小城市との研究プロジェクト「小城の教育」(代表生馬寛信(佐賀大学教授)、平成21年2月～22年12月)

○産学官連携事業

4「佐賀県内歴史データベース構築事業」(代表伊藤昭弘(センター専任准教授)、佐賀県・鹿島市・小城市などと連携、平成21年1月～26年3月)

○文部科学省科学研究費補助金応募大型プロジェクト

5新学術領域研究(研究領域提案型)「19世紀日本における西洋科学の受容と在来知の再編」(代表高崎洋三(センター長)、不採択)

6新学術領域研究(研究領域提案型)「我が国19世紀科学技術における在来知の再構築とイ

ノバージョン」(代表ミヒェル・ヴォルフガング(九州大学理事)、不採択)

I) 外部資金

○科学研究費補助金

- 1 青木 歳幸(センター専任教授) 基盤研究(B)「佐賀藩の反射炉築設・鉄製大砲鑄造技術に関する研究」(研究分担者、平成19～22年度)
- 2 伊藤 昭弘(センター専任准教授) 若手研究(B)「近代日本における塩国家専売制の総合的研究」(研究代表者、平成18～20年度、計3,200千円)
- 3 亀井 森(教務補佐員) 特別研究促進費(基盤研究(C)相当)「幕末京坂文壇の諸相解明—台湾大学「長沢文庫」・東京大学「本居文庫」調査を中心に—」(研究代表者、平成20～22年度、20・21年度計1,800千円)
- 4 伊藤 昭弘 基盤研究(S)「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」(研究分担者、平成21～25年度、21年度100千円)

○その他

- 5 伊藤 彰子(教務補佐員) 公益財団法人クリタ水・環境科学振興財団助成金「日本近世後期における自然環境変動と環境保全意識」(平成20～21年度、計300千円)
- 6 大塚 俊司(教務補佐員) 財団法人鍋島報效会研究助成「戦国期肥前国における大名・国人の偏諱授与」(平成21年度、200千円)

J) 教育関係

○授業担当(専任教員)

・青木 歳幸専任教授

◇教養教育

- 1「地域の蘭学」(平成19年度より毎年前期開講)
- 2「江戸時代の医学と医療」(平成19年度より毎年後期開講)
- 3「医療科学史」(平成20年度より毎年前期開講)

◇大学コンソーシアム

- 4「佐賀の蘭学」(平成21年度開講)

◇e・ラーニング

- 5「チャレンジ佐賀学」(平成22年度開講)

◇文化教育学部

- 6「日蘭文化交流史」(平成22年度前期開講)

・伊藤 昭弘専任准教授

◇教養教育

1「近世日本の社会と経済」(平成19年度より毎年前期開講)

2「近世日本の地域社会」(平成19年度より毎年後期開講)

◇文化教育学部

3「西日本地域史論」(平成22年度後期開講)

K)専任教員研究活動

①青木 歳幸 専任教授

[著書]

1新村拓・青木歳幸ほか『日本医療史』(吉川弘文館、平成18年6月、全323頁、共著)

2『海外交流と小城の洋学—小城鍋島文庫にみる—』(地域学歴史文化研究センター、平成19年10月、全139頁、編著)

[論文等]

3「佐賀藩蘭学再考—医学史の視点から—」(『地域学歴史文化研究センター研究紀要』1号、平成19年3月、39-60頁)

4「小城藩蘭方医研究—宮崎玄益・元立、相良柳沢・柳逸—」(『地域学歴史文化研究センター研究紀要』2号、平成20年3月、59-68頁)

5「小城藩の医学稽古」(『地域学歴史文化研究センター研究紀要』4号、平成22年2月、1~30頁)

[史料集]

6「『小城藩日記』にみる近世佐賀医学・洋学史料〈前編〉」(地域学歴史文化研究センター、平成21年3月、全257頁)

7「『小城藩日記』にみる近世佐賀医学・洋学史料〈後編〉」(地域学歴史文化研究センター、平成22年2月、全371頁)

[資料紹介等]

8「川崎道民『航米実記』とその周辺」(『海外交流と小城の洋学』、平成19年10月、51-55頁)

9「佐賀藩『医業免札姓名簿』について」(『地域学歴史文化研究センター研究紀要』3号、平成21年3月、35-70頁)

10「文政7年(1824)佐賀における麻酔手術」(『日本医史会雑誌』55-2号、平成21年6月、149頁)

11『佐賀学創成プロジェクト 活動報告書』(地域学歴史文化研究センター、平成21年3月、全82頁、編集担当)

12『佐賀医史跡マップ』(佐賀医学史研究会、平成21年6月、全32頁、編集担当)

13『史料保存とアーカイブズ 講演会・シンポジウム報告書』(地域学歴史文化研究センター、平成22年2月、全95頁、編集担当)

[報告]

14「佐賀の西洋医学の普及と民衆」(第65回民衆思想研究会報告、於佐賀大学、平成19年8月)

15「長崎でのシーボルト外科手術を記録した農民」(地域学歴史文化研究センター・仁川文化財

- 団共催仁川・長崎開港場ワークショップ、於長崎歴史文化博物館、平成19年9月)
- 16「小城藩医馬郡元孝の戊辰戦争従軍記」(日本医史学会、於長崎大学、平成19年11月)
- 17「佐賀藩の種痘」(洋学史学会、於京都大学、平成20年3月)
- 18「全国へ広がった佐賀の種痘」(第110回日本医史学会総会基調講演、於アバンセ、平成21年6月)
- 19「佐賀の麻酔外科手術―井上友庵」(第110回日本医史学会、於アバンセ、平成21年6月)
- 20「小城藩の医学稽古」(洋学史学会、於順天堂大学、平成21年9月)

②伊藤 昭弘 専任准教授

[著書]

- 1『成立期の小城藩と藩主たち』(地域学歴史文化研究センター、平成18年10月、編著、全125頁)

[論文]

- 2「藩財政再考―萩藩を事例に―」(『ヒストリア』203号、平成19年1月、108-134頁)
- 3「文久三年の佐賀藩」(『地域学歴史文化研究センター研究紀要』2号、平成20年3月、16～34頁)
- 4「続 藩財政再考―佐賀藩財政に関する一試論」(『地域学歴史文化研究センター研究紀要』3号、平成21年3月、1～15頁)
- 5「明治期の塩業組合―三田尻塩田大会所を事例に―」(荻野喜弘編『近代日本のエネルギーと企業活動』(日本経済評論社、平成22年3月、231～247頁)

[報告]

- 6「藩財政再考―萩藩を事例に―」(大阪歴史学会大会報告、平成18年6月)
- 7「佐賀藩財政に関する一試論」(第65回民衆思想研究会報告、平成19年8月)

L) 部門別活動 研究成果は佐賀学・地域学関連に限定した。

○考古学研究部門

[研究・報告]

- 佐田 茂 「肥前西部の古墳時代の動向」(『地域学歴史文化研究センター研究紀要』2号)
- 重藤 輝行「欧米考古学における社会理論と北部九州の古墳時代研究」(九州大学考古学研究室編『九州と東アジアの考古学―九州大学考古学研究室50周年記念論文集―』、平成20年5月、767-782頁)
- 重藤 輝行「玄界灘沿岸地域の後期古墳」(『第11回九州前方後円墳研究会 後期古墳の再検討』発表資料集、平成20年5月、171-191頁)

[報告]

重藤 輝行「埋蔵文化財行政の近年の動向と考古学」(九州史学会大会 考古学部会、平成20年12月14日、於 九州大学)

田島 龍太・宮本一夫編『久里双水古墳』(唐津市文化財調査報告書第95集、宮本一夫氏と連名による執筆箇所69-79頁、平成21年3月)

重藤 輝行「古墳時代から見た邪馬台国九州説」(吉野ヶ里考古学講座、平成22年2月、於吉野ヶ里歴史公園)

[学会共催]

九州前方後円墳研究会

[その他]

佐賀県内遺跡データベース構築(平成21年4月～、H-4の一事業)

○国文・文献学研究部門

[展示]

特別展「黄檗僧と鍋島家の人々—小城の潮音・梅嶺の活躍—」

「近世の活字文化と佐賀藩」展

特別展「黄檗文化と鹿島藩」

[刊行物]

『市場直次郎コレクション目録』

『黄檗僧と鍋島家の人々—小城の潮音・梅嶺の活躍—』

[研究]

井上 敏幸「近世佐賀の出版—「近世の活字文化と佐賀藩」展開催によせて—」(『地域学歴史文化研究センター研究紀要』2号)

[調査]

市場直次郎コレクション

大内文庫

鹿島市・福源寺

佐賀市・深江家文書(地域史・史料学研究部門と共同調査)

[学会共催]

日本近世文学会平成19年度秋季大会

○洋学・思想史研究部門

[展示]

「海外交流と小城の洋学—小城鍋島文庫にみる—」

〔刊行物〕

『海外交流と小城の洋学—小城鍋島文庫にみる—』

『「小城藩日記」にみる近世佐賀医学・洋学史料(前編)』

『「小城藩日記」にみる近世佐賀医学・洋学史料(後編)』

〔研究〕

K-①参照

〔調査〕

鹿島市・中野家資料

唐津市・馬郡家文書

〔学会共催〕

第116回日本医史学会大会

○地域史・史料学研究部門

〔展示〕

「成立期の小城藩と藩主たち」

「中世小城の歴史・文化と肥前千葉氏」

〔刊行物〕

『成立期の小城藩と藩主たち』

『中世小城の歴史・文化と肥前千葉氏』

〔研究〕

飯塚 一幸「日露戦後地域政治史研究の視角—京都府域を事例に」(『新しい歴史学のために』2005年度4号、平成19年3月、1-13頁)

石川 亮太「国境を超える地域の多重構造」(『韓国学研究』19号、平成20年11月、235-253頁)

鬼嶋 淳 「戦時・戦後の保健医療問題と農村社会—農村診療所の開設をめぐる対抗」(『民衆史研究』75号、平成20年5月、19-36頁)

鬼嶋 淳 「朝鮮戦争期の地域社会における支配と対抗—埼玉県所沢地域の社会運動を中心に」(『日本史研究』558号、平成21年2月、100-125頁)

鬼嶋 淳 「朝鮮戦争期日本社会の周縁—「九州の闇」を歴史的に考えるために」(木原誠ほか編著『周縁学〈九州／ヨーロッパ〉の近代を掘る』昭和堂、平成22年3月、79-95頁)

ほか、K-②参照

〔調査〕

伊万里市・山本家文書

佐賀市・武藤家文書

佐賀市・深江家文書(国文・文献学研究部門と共同調査)

[その他]

「佐賀大正・昭和期年表データベース」(平成21年4月～、H-4の一事業)

「佐賀県古文書データベース」(同上)

地域学歴史文化研究センター外部評価報告

地域学歴史文化研究センター評価委員会

はじめに

地域学歴史文化研究センター(以下、「センター」と略記)は、平成22年度に入り設立より5年目を迎えた。センターの時限は5年と定められており、平成23年度以降のセンターのあり方を考えるためにも、これまでの4年間を総括することとし、外部評価を実施した。外部評価の実施にあたっては、平成21年12月7日施行の「地域学歴史文化研究センター評価委員規程」に基づき、センター長・副センター長・研究部門長により構成するセンター評価委員会において外部評価委員の選定にあたり、以下の4名の方に外部評価委員就任を依頼、ご快諾頂いた(50音順)。

奥村 弘 神戸大学地域連携推進室長、大学院人文学研究科教授
七田 忠昭 佐賀県教育庁社会教育・文化財課参事
柴多 一雄 長崎大学附属図書館長、経済学部教授
園田 寛 佐賀新聞社論説委員

外部評価の実施概要

○ヒアリングの事前準備

センター外部評価は、まず4月中旬に外部評価委員へセンターの刊行物及び外部評価資料を送付し(「資料編」参照)、ヒアリングまでに質問票を返送頂いた。

○ヒアリングの実施

質問票の到着後、評価委員会において回答書の作成及び外部評価ヒアリングの準備をすすめ、下記の通り、ヒアリングを実施した。なおヒアリングには、22年3月までセンター長・評価委員会委員長として外部評価の準備に携わった高崎洋三佐賀大学医学部教授、センターの事業・組織運営などを、今後所属大学での地域史研究活動・地域貢献活動の参考にしたいとの申し出があった松下正和神戸大学大学院人文学研究科助教にオブザーバーとして出席頂いた。

日時 平成22年5月18日 15:00～17:00

場所 佐賀大学本庄キャンパス 学長補佐室

出席者

○外部評価委員

○地域学歴史文化研究センター評価委員

半田 駿 センター長、農学部教授(評価委員会委員長)

青木 歳幸 副センター長、専任教授、洋学思想史研究部門長

伊藤 昭弘 専任准教授、地域史史料学研究部門長

重藤 輝行 文化教育学部講師、考古学研究部門長

※白石 良夫 文化教育学部教授、国文・文献学研究部門長は所用のため欠席。

○オブザーバー

高崎 洋三 地域学歴史文化研究センター運営委員、前センター長、医学部教授

松下 正和 神戸大学大学院人文学研究科助教

○地域学歴史文化研究センター職員

大塚 俊司 教務補佐員

古賀 亜紀 事務補佐員

半田駿センター長のあいさつ、出席者の紹介、センター評価委員会と外部評価の関係に関する説明ののち、外部評価委員長に柴多一雄委員を選任し、ヒアリングを開始した。

ヒアリングは、事前送付資料になかったセンターの予算に関する補足説明を行ったのち、返送頂いた質問票に対するセンターの回答を説明した(66～68頁参照)。

その後、当初計画では附属図書館の貴重書庫(大学所蔵の歴史資料の現況説明のため)、及びセンターの中核施設として利用している菊楠シュライバー館の視察を予定していたが、大雨により移動が難しく、中止した。菊楠シュライバー館については、ヒアリング開始前に外部評価委員の方々には訪問頂いていたため、現況はおおよそご理解頂いた。附属図書館貴重書庫については、口頭で広さ、狭隘化など説明した。

続いて質疑に入ったが、外部評価委員より多くの質問・意見が出され(19～21頁参照)、当初予定していた時間(40分)を大幅に超過した。最後に外部評価委員による報告書提出期限など今後のスケジュールを確認し、ヒアリングを終了した。

○外部評価報告書の作成

6月11日までに各外部評価委員より報告書(7～18頁)をご提出頂き、それを元に柴多委員長に総評をとりまとめて頂いた(5～6頁)。総評提出をうけ、センター評価委員会において外部評価報告書を作成した。

外部評価委員による評価

外部評価委員による評価は、教育、研究、地域貢献、国際交流、組織運営の項目ごとに行われ、それぞれ評価・意見を頂いた。詳細は各委員の報告書、及び委員長総評を参照されたい

が、これまでのセンターの活動に対する高い評価、及び今後よりセンターが佐賀大学及び佐賀地域における歴史文化研究の中核となるための発展的な意見を頂いたと理解している。

おわりに

まず、ご多忙の中膨大な資料に目を通し、ヒアリング出席、報告書作成にご尽力頂いた外部評価委員の皆さまに御礼申し上げます。短い準備期間でしたが、センターの理念・活動についてご理解頂き、適切なお評価・ご意見を頂くことが出来たと考えております。

「はじめに」で述べたとおり、センターは今年度時限の最終年度を迎え、来年度以降のあり方を検討しています。今回外部評価委員の皆さまより頂いたご意見を、将来計画の中に反映させ、地域学・佐賀学を創出し、地域における歴史文化研究拠点としてセンターを発展させて参ります。

地域学歴史文化研究センター外部評価 総評

平成22年6月20日

地域学歴史文化研究センター外部評価委員会

委員長 柴多 一雄

1 はじめに

平成22年5月18日、佐賀大学本庄キャンパス学長補佐室において地域学歴史文化研究センター外部評価ヒアリングを実施した。当日は突然の大雨により附属図書館・菊楠シュライバー館の視察が中止されるというアクシデントに見舞われたが、センターからの補足説明、質問への回答、質疑などを順調にすすめた。特に質疑は各委員より多くの質問・意見が出され、センターへの期待が表れたものだったといえる。その後、6月11日までに各委員より報告書を提出頂いた。

2 評価内容

以下、各委員の評価を、評価項目ごとにとりまとめた。

(1)教育

教養教育や大学コンソーシアム、eラーニングなどを用いた「佐賀学」教育の推進について、概ね高い評価となり、今後、より学生に佐賀の魅力を伝え、地域の歴史から現代の問題を考えるための「佐賀学」「地域学」教育を発展させるよう、求める意見が多かった。さらにセンターが所蔵している文献や資料を学生・市民がより気軽に利用できるような環境作りを求める意見が出された。

(2)研究

専任教員の研究内容、企画展の開催・図録の刊行、研究紀要・史料集の刊行、シンポジウムの開催・報告書の刊行など、これまでの4年間におけるセンターの業績を各委員とも高く評価し、「学問体系としての地域学」創出というセンターの理念に沿った研究が進められている。今後とも上質の研究成果を出されるよう期待が寄せられた一方で、研究成果を地域社会へ還元するための工夫について意見が出された。

(3)国際交流・地域貢献

小城市との共催展をはじめ、公開講座、講演会、シンポジウムなどのイベント、佐賀県・佐賀市が進めている「九州山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録運動への研究面での協力など、センターが十二分に地域貢献を果たしていると各委員とも評価した。今後は佐賀県内の歴史文化

関係諸機関や教育委員会、民間団体との連携を深め、センターの地域貢献活動をより地域社会に浸透させるような体制作りが求められよう。

国際交流は、地域貢献活動に比べれば表立った活動は少ないが、国際シンポジウム・ワークショップの開催や専任・併任教員個々の海外資料調査や研究者ネットワークの構築など、研究推進のための活動が行われていることは評価できる。今後は科学研究費など外部資金を獲得し、一層国際的な研究を進める必要がある。

(4) 組織運営

4部門による研究体制、運営委員会を中心とした運営体制など、センターの理念実現に向けた組織として充分機能している。人員面では、専任教員がいない部門をどう強化するか、若手研究者の雇用形態の再考といった意見が出され、今後センターが発展していくためには、専任・併任・特任教員の拡充や、若手研究者を積極活用するための研究員制度などの検討が求められる。

施設・設備面では、センターの研究中核施設として利用している菊楠シュライバー館は、研究推進のために古文書などの整理・保管が必要なセンターの施設としては手狭・不便であり、実際現状でも寄託された古文書類や購入書籍により同館の書架・書庫は限界に達している。新たな施設の増設などは困難かもしれないが、センターの発展のためには、施設面での改善が早急に求められる。

3 おわりに

上記では触れなかったが、予算面でも大学から十分な手当を受けており、昨今の地方国立大学のなかで、ここまで文系の研究組織に力を入れているところは管見の限り見あたらず、特筆すべきことである。大学中期計画のなかにも「佐賀学」が盛り込まれているとのことで、こうした佐賀大学の姿勢を高く評価したい。

今後、地方国立大学は地域社会における「知」の集積拠点としての役割がより求められる。センターのように歴史・文化面での組織が各大学でも設置されることが望ましい。そうした点でも、他大学の模範となるよう、センターの今後の発展を期待したい。

外部評価報告書

平成22年6月11日

神戸大学地域連携推進室長、大学院人文学研究科教授

奥村 弘

1 基本的評価

佐賀大学の地域学歴史文化研究センターは、佐賀県を中心とした地域社会の歴史文化に着目して、その固有性と普遍性を明らかにすることによって、新たな地域学の創出を目指すという明確な目標をもって活動を進めている。佐賀大学をはじめとして、日本の国立大学の多数は、地域社会の中から、その特質に根ざして生まれてきた。21世紀において、国立大学が、地域社会の担い手の一員として存立していくためには、自らのよって立つ地域的基盤の持つ意味を問い直し、その固有性と普遍性を明らかにすることは必須である。したがって、佐賀大学において本センターの持つ戦略性は極めて高いのであるが、何よりも外の国立大学に先立ってこれを全学センターとして組織化し、4年間にわたって継続し、大きな成果を研究・教育・社会貢献の分野で得ることができたことは、佐賀大学の先見性を示すものとして高く評価できるものである。

2 研究についての評価

同センターの特質の第一は、歴史文化を中心に新たな地域学を形成しようとするところにある。歴史文化を明らかにする作業は、歴史資料の発掘と整理という極めて地味で、長期的な作業を伴うものである。同センターは、附属図書館の歴史資料の整理活用、自治体と協力した資料調査、更に文理両研究領域が共同して行う遺跡調査などを行い、更に史料集や調査報告書の形でまとめて、広く公開している。大学と自治体の持つ潜在能力を引き出しながらこの作業を地道に行っているが、これまでの大学の調査・研究では、このような手法は、意識的に行われておらず、新たな研究手法として高く評価できる。この手法が洗練され、全国のモデルとなることが期待されるとともに、このような調査、研究を地域学形成へとつなぐことが、これからのセンターの課題であるとおもわれる。

大学が関与しない地域では、地域歴史文化が観光資源や「お国自慢」的なアイデンティティを形成するだけのものに終わりがちである。同センターでは佐賀の歴史文化を全国の研究者とともに考えていくためにシンポジウムを開催し、さらに佐賀に関係学会の全国大会を招聘するなど、佐賀地域の固有性と普遍性を全体としてとらえようとしており、地域学形成における大学の持つ研究機関としての重要性を、4年という短い期間で学内外で明らかにしており、この点も高く評価しうるものである。

全国的な発信については、設置から日が浅いこともあり、これからの課題と考えられるが、科研の新領域でヒアリングにかかるなど、この点でも同センターの努力は、十分評価しうると考えるものである。

3 教育についての評価

最近、地域連携においては、教育・研究をすすめる場として地域社会を積極的に位置づけることが重要となっている。同センターは、研究を主軸とするものであるが、地域学の場合、それを学び、地域社会で活用していく担い手としての学生の位置は極めて重要である。したがって同センターにおいても、関係教員が教養教育や専門教育に当たるとともに、センター展示室や閲覧室を活用した学生・市民利用事業も進めている。センター関係教員が少ないにもかかわらず多彩な教育活動が行われている点は十分評価しうるものである。センターの在り方からして、教育活動については、全学の教員が一層協力できる環境づくりが重要であると思われる。この点はセンター側の努力だけでなく、全学的、組織的な対応も重要であると思われるが、ヒアリングを通してなお強化する必要があると思われた。

4 地域貢献・国際交流についての評価

大学の地域との関係は、一方的な大学側による「貢献」ではなく、いかにパートナーシップを確立し、長期にわたって持続的、継続的な相互関係を形成できるかどうかにかかっている。この点、同センターは、佐賀県や小城市等と持続的な連携関係を基礎にして事業を展開しており、この点は高く評価できる。今後、自治体との共同研究による資金導入や、外部資金の共同した獲得などについても意識的な努力も必要となってくる。そのためには、産学連携とは異なる資金受入れのための大学側の組織整備も必要となると思われる。

国際交流については、佐賀の特質を活かして、その成果を発信していくという点について評価しうると考える。地域歴史文化の普遍性を国際交流と関連づけて行うことは、教育研究機関としての大学の重要な機能であり、この点の意識的な追求が今後も望まれる。

5 組織運営についての評価

佐賀大学が全国の国立大学に先駆けて同センターを設置したことについての高い評価は最初に述べたとおりである。地域の中の大学として、地域社会の文化を担っていくという活動は、事業の継続性と大学での知の蓄積と継承がなくては行えないものである。この点で、専任教員を置いていることが評価しうるが、任期制を取っていることは、持続性が必要な事業内容からみれば問題があるように思われる。地域学についてのノウハウと地域との信頼関係は、第一義的にはセンター専任教員の頭脳の中に蓄積されていくのであり、センター及びその専任教員が安心して教育・研究・社会貢献に携わることができる環境が必要である。また若手の研究者を教務補佐員等で雇用しているが、その役割との齟齬が大きく、科研申請資格を持つ有給研究員制度の充実が必要

であると思われる。

またセンターの施設は、ユニークで歴史性を感じさせる点でも好ましいと思われるが、作業スペース等がほとんどないなど、改善すべき点がある。機能的、合理的な施設充実と合理的な利用方法が追求される必要がある。

6 おわりに

佐賀大学の地域学歴史文化研究センターは、全国の国立大学に先駆けて、地域課題を正面から捉えるものとして設立され、それにふさわしい活動を行っている。地域社会の疲弊が進み、文化的な基盤が解体しかねない中で、今後、地域社会の文化を大学が意識的に担うことは、国立大学に共通する全国的な課題となっていくと思われる。その際、佐賀大学が、全国的なネットワークの重要な核の一つとなると考える。それにふさわしいセンターとして充実することを期待するものである。

外部評価報告書

平成22年6月11日

佐賀県教育庁 社会教育・文化財課参事

七田 忠昭

1 はじめに

佐賀は、太古から、その地理的環境とも相俟って大陸の先進文化の受容地として、また、それらの文化を発展させ、さらに他の地方へ伝えるといった特性を持った土地であった。特に弥生時代と幕末・維新时期は、日本史の中で佐賀が大きな光を放った時期であったとすることができる。そこには常に海の向こうをみつめる進取の気性に満ちた佐賀人たちの弛まない努力が存在したからである。

しかし、現状では佐賀の元気が停滞し、地域の底力といったものを表現出来ない状況が続いているかのようである。博物館や美術館などの施設で地域の歴史・文化に関する展覧会が開催されても入館者の数は伸びず、主催者もこの現状を打破できずに慣れてしまっている。

地域の歴史・文化を知ったところで何のためにもならないといった近年の県民性からくる結果と考えられる。限られた人々だけを対象とした活動(専門性の高い活動は仕方がないことかもしれないが…)だけではなく、多くの人々が自分たちの過去を知ることが大きな地域の力となる、ということを感じてもらおうこともセンターの大きな役割のひとつだと考えられる。

センターの日常的な活動や、平成22年5月18日の外部評価ヒアリングを通して、外部評価委員として気付いた点や意見を下記のとおり述べさせていただく。

2 センターの活動について

(1)教育

センターの研究成果を応用した地域学教育の一環として、教養教育、あるいは文化教育学部などと連携した教育が実践されていることは評価できる。

センター専任教員の専門性から近世・近代に偏っている事は否めないが、幕末の科学技術導入などの佐賀藩の先進性、独自性についての講義は、佐賀に関心を持つ契機になるものとして適切と考えられる。

佐賀の特質といったものを広く教育し、共に考えることができるよう、教養教育の主題科目「地域と文明」の中で併任教員も含めた幅広い分野の講義が期待される。また、地域の大学といった観点から、学部を問わず、センターの教員が地域学教育に積極的に関わっていただき、佐賀出

身の学生のみならず、他県から入学した学生に佐賀の魅力を発見してもらい、学生諸君が卒業後も愛着をもって佐賀と何らかの関係を保ってもらおうよう期待する。

(2)研究

研究については、問題はない。専任教員を中心とした研究実績は数多く、センターから出版された数多くの書籍・図録は、地域史のための基本文献となるものと評価される。併任教員においても、それぞれの専門分野で多くの成果を挙げられていることも承知している。

学内でセンターと文化教育学部、経済学部など異分野の研究者が集い研究会を開催していることについては、総合学としての地域学の発展にとって、よい取り組みだと考えられる。

特に文献のない太古の時代については、発掘された遺跡や遺物の考古学的な分析のみでは十分な情報を得たとは言い難く、自然科学的方法を含めた学際的な研究が求められるが、センター教員の陣容はこのことを可能にしていると考えられる。これまでの県や市町村の文化財発掘調査に関する協力・指導を、さらに強化していただきたい。

私が専門としている考古学の分野では、新進気鋭の重藤先生が赴任されて以来、県内の発掘調査等を実施している佐賀県教育庁社会教育・文化財課や、市町の教育委員会、博物館等の県内文化施設との連携が良好になったように感じられるが、これもひとえに先生の豊かな学識に基づく指導力のおかげと考えられ、一層の協力をお願いしたい。県や市町が蓄積した考古学情報を広く公に出来るよう、現在県や市町と連携して進められているセンターの考古学データベース作成には大いに期待している。

(3)地域貢献

自治体その他の機関との連携によるシンポジウムや展覧会、講演会などを積極的に開催するなど、センターの研究成果を地元で公開するといった姿勢は大いに評価される。準備段階からの共催機関や地元自治体、研究グループとの連携した事業の進め方については、それら機関や自治体の資質を高め、地域に共感をもたらした点で大いに評価される。センターの教員による講演会や研究会での、地域に根ざした発表も然りである。

また、センターの教員が、県や市町の各種委員として、地域の歴史や文化の保護に積極的に参画し指導していただくことが多くなってきたことも、センターの存在そのものが行政や地域の中にも浸透してきたことを示すものとして評価される。忙しい業務の中での委員就任であるが、文化財保護、地域文化振興のために努力していただきたいと思う。

佐賀県と佐賀市が積極的に進めている「九州山口の近代化産業遺産群」の世界遺産登録推進についても、幕末・維新期の科学技術に関する文献上の裏付けや、地下レーダー探査、各種分析などの自然科学的な分野からの指導・助言をいただいていることも、大きな地域貢献として評価できる。

センターの研究成果や存在意義を大学の内外に示すために、全ての人々（一般県民の方々

や他大学を含めた学生)を対象とした、原始時代から現代までの佐賀の特質を主題とする分かり易い連続講座を市内中心部で開催することなども、考えてみてはどうかと思う。

(4)国際交流

センターが主体となった国際交流については、あまり表面には見えてきていないが、様々な海外研究者とのネットワークを構築されている先生も多いと聞いている。弥生時代など考古学では韓国や中国の、幕末・維新时期ではオランダなどの西欧諸国の研究者との情報交換や共同研究も、地域学を深めるために、さらに積極的に進めてもらいたいと思う。

予算的に厳しいと考えられるが、センターの経費以外でも科学研究費などを活用するなどして、是非推進していただきたい。

(5)組織運営

考古学研究、国文・文献学研究、地域史・資料学研究、洋学・思想史研究の4部門で構成されており、部門ごとに一定の成果を挙げられていると思うが、専任教員が配置されていない部門での活動は、併任教員の本務との関わりの中で、困難が伴うと考えられる。センターが行おうとしている活動・事業の目標を達成するために、さらなる組織の充実が必要だと感じる。

県内には文化施設や高等学校などの教育機関、県や市町の教育委員会事務局、民間組織の中で研究実績を積んでいる歴史・文化に造詣の深い人材を、センターとして活用することも体制を強化するための策として考慮してみてはどうかと思う。

3 おわりに

センターの目標に対して、限られた人員や施設、予算の中で、専任教員、併任教員、特命教員が一体となって、センターの目的を達成できるよう、並々ならぬ努力をされていることが認められる。

全国的視野、東アジア、さらには世界的視野で、佐賀の地域文化の普遍性と特質を研究し、その成果を地域に還元するために、また、佐賀大学が佐賀に根付いた大学であるために、「地域学歴史文化研究センター」は、組織・予算を含め、更に内容を充実させることが求められていると考える。

センターの専任教員や文化教育学部、経済学部のみならず、農学部、工学系研究科、医学部など理系の教員を巻き込んだ学際的な組織として、さらに総合学である「佐賀学」の研究を進展していただくものと期待している。

佐賀大学の学内共同教育研究施設の中で、当センターは唯一全学すべての分野の知識・情報を地域という視点で総合し、その目的を果たすことができる組織であり、地域に根ざした佐賀大学の情報発信の中心に位置づけられるべき存在と思う。組織の現状維持ではなく、拡大する方向での検討が望ましい。

センターを訪れて資料と対峙し、教員から指導を得て、また、ネットでセンターにアクセスすれば、誰もが佐賀の地域性、歴史・文化についての情報を手に入れることができるような機関であって欲しいし、また、センターで得た情報や研究者との交流によって、閉塞感のある地域情勢を打開し、活力に満ちた人づくり、地域づくりを、県民や学生に啓発し、率先していくことができるセンターであって欲しいと期待している。

外部評価報告書

平成22年6月10日

長崎大学附属図書館長

柴多 一雄

1 はじめに

佐賀大学地域学歴史文化センターについて、事前に送付された外部評価資料および5月18日のヒアリング当日に配布された追加資料、さらに当日行われた質疑応答にもとづき、気づいた点を報告させていただきます。

2 センターの活動について

1) 教育

佐賀大学地域学歴史文化センター(以下、センター)は、研究を主たる目的として設置されている施設ですが、専任教員が『佐賀』学入門などの講義を担当し、教育にも携わっていることは高く評価することができます。

センターが、「地域(佐賀)の歴史文化の固有性と普遍性を探究すること」を目的としていることから、センターの研究成果を学生に還元することは、学生の地域への学問的な関心を深め、佐賀大学への帰属意識を高める上で、大いに意義のあることであると思います。

本来の目的である研究を活動の中心としながらも、これからも積極的に教育に従事されることを期待します。

2) 研究

専任教員の研究は、センターの目的、「地域(佐賀)の歴史文化の固有性と普遍性を探究すること」に沿って行われており、その業績も高く評価することができます。

研究紀要はもちろん史料目録・史料集等も数多く刊行されており、国際シンポジウムの開催や資料調査の実施など、その成果を着実に積み重ねてきているということが出来ます。

今後さらに研究を積み重ね、佐賀学とはなにか、地域学とはどうあるべきかという議論を深化させることによって、「新たな学問体系としての地域学を創造すること」を果たされることを期待します。

そのためにも、学内・学外の研究者をさまざまな形で組織し、さらに研究を活発化していく必要があると思われます。すでに、学外研究者の協力を得るため、特命教員・研究員の制度が設けられていますが、これまで任命している特命教員だけでなく、地域の研究者を特命研究員に任命

するなど、佐賀学(地域学)に理解と関心のある研究者の協力を積極的に得るように努力していただきたいと思います。

3) 国際交流・地域貢献

教員の研究にもとづく多彩な展示会を主催・共催し、広く全国から講師を招いて講演会を開催するなど、地域への貢献は高く評価することができます。センターの活動から佐賀市におけるアーカイブズの取り組みが始まるなど、センターの存在は、地域の文化活動の振興にとっても重要な意義を有しているといえます。

今後は、個別の展示や講演会の開催だけでなく、県内の博物館や文化財関係の諸機関、図書館等との組織的な連携に取り組むことによって、地域における歴史文化研究の拠点としての役割を果たされることを期待します。

4) 組織運営

センターは、規模的には小さな施設ですが、その目標はきわめて大きく、目標を達成するには、学内他部局との連携は不可欠です。とくに、センターと関係の深い附属図書館や教育文化学部、経済学部との連携は、センターの活動をさらに発展させるうえからも必須であると思います。

どのような形での連携が可能か、たえず検討し続けていくことが必要であると思われます。たとえば、附属図書館とは、資料の保存等だけでなく、機関リポジトリによる研究成果の公表など、情報発信の面でも協力が可能ではないでしょうか。

施設面については、現在センターが置かれている菊楠シュライバー館は文化財として貴重な建物で、センターの目的にも沿った建物ですが、その狭隘さは大きな問題と言わざるを得ません。現在の建物での活動は、すでに限界に達しているのではないのでしょうか。現在の建物は、展示施設に特化し、研究や資料の保存スペースは他の場所に移すなど、抜本的な対応を早急に行う必要があると思われます。

5) その他

財政面においては、当面の活動に支障が生じるおそれはないようです。しかし、今後の活動の展開を考えたとき、科学研究費を初めとする各種外部資金を積極的に獲得し、研究のための財源を確保していくことが必要になるでしょう。

また、センターのような施設は、研究のための経費だけでなく、史料の整理・保存・修復等のための経費が必要になりますが、こうした直接研究にかかわらない経費をどのように確保していくかも今後の重要な課題になると思われます。

3 まとめ

以上、述べてきましたように、これまでのセンターの活動は、教育、研究、地域貢献の各面において高く評価することができます。今後も、こうした活動を継続し、長期的な戦略のもとに、「新たな学問体系としての地域学の創造」に邁進していただきたいと思います。

大学が、「地域(佐賀)の歴史文化の固有性と普遍性を探究すること」は、きわめて重要であり、地方大学の責務でもあります。センターが、この目標を達成するには、学内・学外の研究者との協力、学内他部局との連携だけでなく、大学からの支援が欠かせません。

そのためにも、センターの活動やその意義を学長をはじめ大学執行部に強くアピールし、全学的な共通認識を獲得していくことが不可欠となります。研究はもちろんですが、こうした努力を不断に行っていくことが、これからの大きな課題になっていくと思われます。

センターの今後のさらなる発展を期待いたします。

外部評価報告書

平成22年6月11日
佐賀新聞社論説委員
園田 寛

1 はじめに

2006年4月に佐賀大学地域学歴史文化研究センターが設置されて4年を経過した。これまでのセンターの活動がどうだったか、外部の目から見た評価を述べたい。評価の資料として事前にセンターが刊行した出版物を頂いた。毎年一回発行している「研究紀要」1～4号と「市場直次郎コレクション目録」(07年)、『『小城藩日記』にみる近世佐賀医学・洋楽資料』前後編2冊(09、10年)、「史料保存とアーカイブズ」講演会・シンポジウム(09年)の報告書と「成立期の小城藩と藩主たち」展(06年)「海外交流と小城の洋学」展(07年)「黄檗僧と鍋島家の人々」展(08年)「中世小城の歴史・文化と肥前千葉氏」(09年)のそれぞれの展覧会図録だ。センターが地域文化の掘り起こしに並々ならぬ情熱と努力を注ぎこまれていることは十分伝わってきた。改めてセンターの活動に敬意を表したい。5月18日に評価委員会とヒアリングがあり、活動内容や組織の現状、予算についても詳しく説明していただいた。あいにく大雨で図書館の貴重書庫を見学できなかったのは残念だった。以下に刊行物とヒアリングから気づいたこと、感じたことを報告する。

2 センターの活動について

(1) 教育

センターの開設によって、江戸時代を中心とした佐賀、小城、鹿島、伊万里などの歴史研究が急速に深まったことを喜びたい。佐賀は他県に比べて古文書が豊富に残っているのに、研究者が少なく、ほとんどが手つかずのままになっていた。学生や一般市民に歴史的な佐賀の魅力を気付かせることは、自信と誇りを取り戻す意味でも大変意義深い。『『佐賀』学入門』などの受講者には興味を持ち続けてもらいたい。特に学生は佐賀に残って研究を続けていけるような環境づくりが必要だろう。

収集した文献は、学生、市民が閲覧しやすい状況をつくってほしい。市民にとって、大学内は気軽に入りにくい。市街地にセンターを置けば、市民の目にも付き、空洞化した商店街の人集めにもなる。市民との交流センターを市街地におくことも検討してほしい。

(2) 研究

「山本家文書」の調査、解読は江戸時代の庶民の暮らしを知る上で興味深い。一般に分かりやすいエピソードがあれば、その都度、ホームページや新聞などでコラムとして発表してほしい。

三重津海軍所跡などの世界近代化遺産登録に向けたシンポジウムや地中レーダーを使った発掘調査は、県民の興味や期待を高めた。川副町の筑後川沿いに海軍所があつて、蒸気船が行き来していたことを、多くの人がイメージできた。さらに現地の当時の細かな状況をイメージできるような研究、イベントなどを行い、遺跡保存の機運を高めたい。調査の進捗状況をホームページなどで知らせてほしい。

(3) 国際交流・地域貢献

科学技術史分野を中心に欧米研究者、さらに東アジア交流史の視点から中・韓・東南アジアの研究者との交流はぜひ実現してほしい。古伊万里とオランダの東インド会社との関わり、久米邦武の「米欧回覧実記」などの研究は全国でも研究者が多く、ぜひセンターでも研究成果を蓄積してほしい。

収集した古文書データベースや年表データベースなどはいずれ一般に公開してもらいたい。佐賀新聞社にも明治時代からの新聞のデータベースがあり、相互に利用できるようなシステムを構築したい。

(4) 組織運営

これからさらに収集資料が増えていけば、シュライバー館では手狭である。附属図書館を共同使用するにしても限度があるだろう。新たな施設整備計画を早急に検討すべきだろう。

3 まとめ

昭和初期には佐賀にも「肥前史談会」など歴史研究グループが活発に活動していた。しかし、今は「葉隠研究会」くらいしかない。佐賀民俗学会も解散した。このままでは佐賀の歴史文化研究は途絶えてしまう。地域学歴史文化研究センターには県内の歴史文化研究の核として、多くの研究者の育成する重要な役割が課せられている。活動の持続が大切だ。そこから再び「史談会」などが生まれればと期待する。歴史は過去のものではなく、現代に生かすものだ。センターでは歴史の掘り起こしだけでなく、歴史の教訓を現代と未来にどう生かせるか、その指針を示してほしい。再び佐賀が科学技術や医学などで先進県と言われるようになるように、研究成果を生かしてほしい。

外部評価ヒアリング質疑要旨

(外部評価委員)特命教授の任用は、かつて教授を勤めた者に限られるのか。

(回答)定年退職された方、十分な実績がある方をお願いしている。

(外部評価委員)研究員はいないのか。

(回答)非常勤のポスドク研究員が一人いる。

(外部評価委員)神戸大でもかつては教務補佐員を置いていたが、現在では研究員を置いて いる。教務補佐員はキャリアとして認めにくいいため、研究員にする方向を検討すべき。

(回答)今後検討する。

(外部評価委員)佐賀学を研究した方が、できるだけ佐賀で就職する方向が望ましい。

(外部評価委員)佐賀大学で歴史学をやっているところはどれくらいあるのか？

(回答)佐賀大学には、文化教育学部・経済学部日本史の教員はいるが、歴史の研究室はなく、博士課程もない。佐賀学の授業を通して、学生が佐賀に残るような方向性を得ていくことができると考えている。学生をセンターで取ることはできないので、個人的に指導する形となっている。

(外部評価委員)学内プロジェクトの公募は、どういった形で行われているのか。

(回答)学内教員・研究グループが提出する研究計画のなかから、3件前後選定されている。「佐賀学」プロジェクトの場合、毎年報告書を出し、2年目の終わりにヒアリングを行った。

(外部評価委員)学内プロジェクトの予算の枠は、どれくらいか。

(回答)学長経費という枠で、一件あたりおよそ500～600万円である。

(外部評価委員)センターが研究対象とする時代には、現代も入るのか。

(回答)現在は終戦直後頃までを主な研究対象としているが、現代の佐賀も視野に入れている。

(外部評価委員)旧制佐高出身の伊藤静雄の詩集が出た。ぜひ研究で扱ってもらいたい。

(回答)多様な分野の先生方の協力によって、研究対象を広げていきたいと思う。部門の再編・拡充も考えている。

(外部評価委員)併任教員の現状はどうか。学部での仕事との兼ね合いは大丈夫か。

(回答)例えば重藤併任講師の場合、考古学データベースを担当している。その他の併任教員も、学部での仕事が忙しい中、それぞれ担当の業務を遂行している。今後併任教員などスタッフの増員を目指したい。

(外部評価委員)博物館の学芸員など、地域の人たちと集まって話し合う場はあるのか。

(回答)個別に協力することはあるが、ネットワーク形成までには至っていない。

(外部評価委員)全体で連絡を取り合うようなネットワークが必要。また、県内研究者の研究のすりあわせを行うべき。

(回答)大学が交流の要となるような環境作りをすすめたい。

(外部評価委員)予算が大きく、佐賀大学のやる気が伝わってくる。拡大を考えた場合、説明が大事になる。どこをアピールしながら進めていくか。

(回答)文系による地域貢献はこれまでにはない。地域の先進性という特性をアピールする。これからどうやって、地域学をしっかりと明らかにしていくか、ということに意味がある。他地域との比較が必要なので、他大学と連携をしながら拡大を模索する。

(外部評価委員)佐賀大学には人文系の博士課程がないが、地元に残って歴史研究を続けていく人々をどうやって生み出していくのか。歴史文化の扱い方や研究の仕方についての再教育が必要。地域の史談会は高齢化して、絶えていく段階にある。文化を担える力を持った人を、どうやって育成するのか。核になっていく人を育てるという意気込みが必要。

(回答)山本家文書のワークショップのように、実物を見るということが強力なアピールになる。そこから市民のグループを、どうやって組織していくか、が課題である。

(外部評価委員)地元のメディアとの連携も重要。収入源を市民から支えてもらうという方向性もある。

(回答)今後メディアや市民との連携をより深めていきたい。

(外部評価委員)地域にとって、なくなると困る、という位置づけを得ることが必要。また 附属図書館との連携はどうなっているか。

(回答)図書館の佐賀関連の図書をセンターで管理させてもらっている。その他には小城鍋島文庫の調査・展示で協力している。

(外部評価委員)図書館員の研修はしないのか。図書館員の専門性も必要。

(外部評価委員)データベースを、センターが中心となる形でコーディネートすればいい。

(回答)附属図書館とセンター双方がプラスになるような連携を検討中である。

(外部評価委員)一般市民が史料を見ることはできるのか。

(回答)小城での展示は、大学が持っている貴重資料を市民に公開する、という目的がある。

(外部評価委員)一般市民が史料を閲覧できる日を決めてもらいたい。

(回答)附属図書館と協力し、展示・公開をすすめたい。

(外部評価委員)センターに対する一般の認知度は、どれくらいか。

(回答)講演会開催などを通じ、徐々に認知されているが、まだ不十分である。

(外部評価委員)学内での受けとめ方はどうか。

(回答)学生にとっては縁遠くなっている。教員からは、評価する声もある。

(外部評価委員)『佐賀学入門』という本は作らないのか？センター同士、お互い協力しあえば、学内でも認知度は上がる。

(回答)これからの計画の中で考えてみたい。

(外部評価委員)新入生に、佐賀について教える授業はあるか。

(回答)教養教育で、佐賀について実践的に学ぶ授業を開講している。

(外部評価委員)世界遺産に関しては、地域の人たちが地域の遺産や歴史をよく守っている、ということが評価される。その中で大学は何をやれるのかを考えてもらいたい。

(回答)世界遺産への関心の高まりを、身近な歴史遺産、佐賀の歴史そのものに対する関心を市民に広げるような契機にしたい。

(外部評価委員)施設が手狭なのをどうするか。今後のネックになる。

(回答)施設の問題は緊急の課題だが、学内の既存施設では解決が難しい。今後センター同様に書庫の狭隘化の問題を抱えている附属図書館と連携し、施設の拡充を求める、といった構想を持っている。